

# 論文の内容の要旨

## 論文題目

ミュージアムにおける科学を巡る対立  
——現代アメリカの医学博物館及び天地創造科学博物館の事例から

Conflicts of Science in Museums: Case Studies of Medical Museums and Creation  
Science Museums in Contemporary America

## 氏 名

小森 真樹

本論文は、人体展示の医学博物館及びキリスト教天地創造論の科学博物館という二つの事例から、ミュージアムにおける科学を巡る対立を大衆性の観点で考察するものである。それを通じて、現代アメリカにおける価値観の分断のメカニズムを明らかにすることが本論文の最大の目的となる。

本論文は以下の三部から構成される。ミュージアムの分析を通して公衆による科学の理解や科学観の対立について研究する方法を論じる第一部（一章）、医学博物館における人体の展示と倫理的な摩擦について検討する第二部（二、三、四章）、そして創造論の博物館教育にみられる信仰の正しさを主張する手法について検討する第三部（五、六、七、八章）——以上の理論的考察と二つの事例の検討からミュージアムにおける科学を巡る対立について論じることで、本論文では、アメリカにおける価値観の分断のメカニズムを描き出すことを試みた。

第一部（第一章）では、事例を分析するための研究方法を論じた。「ミュージアム／展示の政治学」論の議論から始めて、ミュージアム研究の理論を、領域を横断しながら系譜づけた。また、科学論における理論的視座を示し、この研究の視座「ミュージアムにおける科学知識の政治学」を明確にした。

続く第二部（第二章から第四章）では、フィラデルフィアの医学博物館ムター博物館における人体の展示を事例として、「医学と展示」を巡る価値観の対立について議論した。本事例の考察にあたっては、ミュージアムはコレクションに文脈を与えてその概念を変化させているという「芸術=文化システ

ム理論」を援用した。また、知識史及びパブリックヒストリーの歴史学的方法を併せることによって、ミュージアムの歴史を、上位文化と下位文化が交流して概念が生み出される現場として分析した。

第三章では、アメリカの医学史における人体展示の歴史的背景や展示倫理の問題を概観し、「医学教育の公開性」、「ボディ・ワールズ展」、「先住民遺骨の返還運動」を巡る展示倫理に関する議論を取り上げることで、研究の中心事例であるムター博物館の位置づけを確認した。

第四章では、アメリカ医学の黎明期から続く、伝統的な医学博物館であるムター博物館の歴史を追いながら、時代によって人体を含む医学コレクションに与えられる意味が変わっていく様子を、社会背景や学問の変遷等も示しながら描いた。そのコレクションの当初の意味は、医学協会が共有して医師が使うための「道具」であったが、アメリカ合衆国建国二百年祭を契機としてアメリカ史を語る「歴史資料」へと変化した。さらに、美術館のコレクション事業と美術史理論が「医学美術（アルスメディカ）」という枠組みを与えることで、ムター博物館の物品は「芸術品」へと変化した。そして経営の重点化と科学教育の普及事業を通じて、人体コレクションは展示の材料として、また、ミュージアムグッズに用いられて商品化され、「消費財」としても利用されている。

ムター博物館の医学芸術の展開と教育普及を重視する経営路線は、一面では見世物的なまなざしで遺体を消費する倫理的な問題を生じさせた。遺体の過度な商品化を問題視する立場と、倫理的問題よりも医学教育・芸術価値を優先させて遺体の商品化を推進する立場のあいだに分断が起こったのである。結果的に倫理面における批判の声が高まることはなかったという事実は、ミュージアムの持つ「芸術の崇高さ」や「科学の権威」が人体展示の正当化の役割を果たしていることを示している。また、倫理的な障壁をかわすことで、分断された両者の間には対話が不在となっている。第二部では、このようなミュージアムの「正当化の暴力」として、人体展示を巡って対立するアメリカ社会を論じた。

第三部（第五章から第八章）では、キリスト教天地創造科学博物館を事例として、信仰を巡って対立するアメリカ社会を「宗教と展示」から議論した。聖書の記述の絶対的真理を信じ、進化論を否定する天地創造説は、近年、これを「科学」理論として証明しようとする「天地創造科学」の高まりによって、ミュージアム教育が重要な役割を担うようになってきた。

近年、科学博物館においては、レプリカ等だけでも展示で物語を伝えることが可能になるという「モノ性の後景化」が進行している。また、現代アメリカのミュージアムにおける文化戦争では、ミュージアムが言論を制御する力を持つ場であるという「博物館戦術」がある。科学知識の社会学では、他の知識の体系から近代科学について批判する「対称性の人類学」が論じられている。つまり、創造科学博物館では、モノを使わない科学展示が可能になったことで、天地創造科学の「科学」性を主張することができるようになり、「博物館を使った戦術」にしたがって「科学の対称性」を論じることで、創造科学の真理を主張しているのである。

アメリカ合衆国における創造論・進化論論争は、聖書信仰を公教育に持ち込もうとする運動とそれを制限する力の拮抗が、十九世紀半ば以降長年に渡って展開してきた。1980年代には宗教と政治の保守派が融合して「宗教右派」を形成し、同時期にキリスト教を娯楽文化産業として展開する傾向が様々な領

域で高まったことにより、創造科学が生まれる素地が形成された。天地創造科学はミュージアム、テーマパーク、学校というそれぞれの場所で教育され、またそれらは相互に関係して展開してきた。公教育においてキリスト教信仰が強く制限され、同時にキリスト教勢力の保守化が強まったことが、天地創造博物館を公教育における「抜け道」として利用することにつながり、現在の天地創造科学の隆盛につながった。

本論文では、2007年にケンタッキー州に開館したクリエーション・ミュージアムを事例とし、天地創造科学博物館の歴史、展示の構成、展示物に見られる論理を分析した。同館の展示や館長の語りには、「創造論」と「進化論」の二つの科学の対称性を強調することにより、創造論を科学として権威づける「対称性の博物館戦術」が見られる。ミュージアム展示や創造論についての問題を語る際、来館者や周辺住民は一般的な「左右」の立場の二元論に陥っており、これこそがクリエーション・ミュージアムの「対称性」の語りの戦術に乗り、天地創造科学の科学性の正当化に加担することになる。創造論・進化論問題は、本研究が行った参与観察のように、現場の緻密な観察から多様性・複雑性を含めて描く必要がある。

第八章では、クリエーション・ミュージアムの姉妹施設のテーマパークで、2016年に近隣に開館したアーク・エンカウンターを主な事例とし、民族誌的記述や展示の言説分析によって、創造科学教育におけるテーマパークの教育的効果や語りの構造を明らかにした。アーク・エンカウンターは、クリエーション・ミュージアムに見られた論理と同様に、対称性を主張する戦術的な語りを用いることによって、ノア方舟が史実として科学的に合理的であることを主張して、創造論共同体内部を結束させている。その一方で、アークに見られる天地創造科学教育の戦術は、本物の科学的根拠の価値を前提としないという点でクリエーション・ミュージアムと異なる。アークは初めからその展示がレプリカであり、それが「テーマパーク」であることを強調するが、同時に体験型アトラクションとして来園者に強い実感を与えることにより、ノア方舟の実在性を来館者に抱かせるのである。また、キリスト教に関連するミュージアムやテーマパークでは「受難劇」と「ヘルハウス」という二つのキリスト教の演劇も応用されており、創造論教育の効果を高めるのに重要な役割を果たしている。

天地創造科学では、文化戦争において科学知識が相対化されている言論状況を利用し、進化論と創造論という二つの「科学」が並列であると強調することにより、創造論の科学性を権威づける論理が、戦術的に実践されている。天地創造科学博物館は、現実社会に両科学間の「対話」が実在することを演出する戦術であり、ミュージアムの機能にはこうした「捏造の暴力」がある。

以上の議論を通じて本研究は、ミュージアムを通じて倫理的対立が回避される過程や、立場が正しいと主張するために対立そのものが捏造される過程を描くことによって、現代アメリカにおける価値観の「分断」のメカニズムを明らかにした。ミュージアムは、これまで強調されてきたように協働する場を提供して対立する価値を調停するだけでなく、「正当化」と「捏造」によって分断を支える暴力性を孕んでおり、その機能には功罪があると結論づけた。